

伯耆ふるさと伝承

～ 出雲の歴史は “ 大山 ” から始まった ～

1. 海流に乗って文化がやってきた

< 天然の良港であった山陰 >

- ・ 島根半島は日本海にせり出した半島であり、西端の日御碕灯台、東端の美保関灯台が有名である。そして半島の南側には、宍道湖、中海が広がっており、鳥取県と島根県にまたがる中海圏域観光の中心的な役割を果たしている。現在は、出雲平野が広がり、松江は大橋川、境港は境水道に橋が架かり自由に行き来できるようになっている。
- ・ しかし、太古の昔、島根半島は日本海に浮かぶ大きな島であったと言う。
- ・ 大山王国の運営を手がけている石村氏によると。

☞ 伝承者 石村隆男氏：

- ✓ その昔、島根半島は日本海に浮かぶ細長い防波堤のような島であった。
- ✓ その島が日本海の荒波を防いでくれるため、南側の陸地との間は穏やかな内海となっていた。

- ・ 「国引きの伝説」にもこの状況を物語るくだりがある。出雲風土記に描かれている記述によると。



大山王国 歴史文化 探訪 MAP より

☞ 伝承者 出雲風土記：

- ✓ その昔、島根半島は、四度に分けて土地を引っ張って来たというものである。
 - ✓ 一度目は「志羅紀（新羅）」の余った土地を「佐比売山（三瓶山）」を杭にして「園の長浜」を綱にして「去豆の折絶（平田市小津）」から「八穂爾支豆支（杵築）の御崎（大社町日御碕）」までの国として引っ張ってきた。
 - ✓ 二度目は「北門の狭伎の国（出雲北方の出入口）」の土地を「多久の折絶（八束郡鹿島町）」から「狭田の国（鹿島町佐陀本郷）」まで引いてきた。
 - ✓ 三度目は「北門の良波の国（八束郡島根町野波）」の土地を「宇波の折絶（松江市東北端の手角？）」から「闇見の国（松江市本庄町新庄）」まで引いてきた。
 - ✓ そして四度目に「高志（越）の都都の三崎（能登半島の北端珠洲岬？）」の余った土地を引っ張ってきたのが「三穂の埼（美保関町）」で、この時の綱が「夜見嶋（境港市付近にあった島）」、打ち込んだ杭は「伯耆國の火神岳（大山）」であった。
- ・ 当時は、弓ヶ浜もなく境港市の辺りに「夜見の島」という島があったようだ。現在の地形とはかなり異なっていた。
 - ・ 朝鮮半島の方から島根半島の沖に流れ込む海流がある。その海流の一部が島根半島によって流れが変わり、赤崎沖の方へ流れ込む。そして渦を巻くようにして夜見の島の辺りまで流れているという。この流れが後に弓ヶ浜をつくる大きな力となるのである。
 - ・ 確かにこの辺の海岸では、ハングルの入ったゴミがたくさん落ちている。

< 地元に根付いた大陸文化 >

- ・ この地方には、多くの大陸文化の痕跡が残っている。島根半島の北側にある^{うづぶるい}十六島、大山町にある孝霊（高麗）山、淀江町から出土した石馬などである。
- ・ 大神山神社の宮司を努める相見氏によると。
 - ☑ 伝承者 相見行佳氏
 - ✓ 島根半島には、新羅の国王をお祀りした神社が残されているという。
 - ✓ 百濟、新羅からの渡来人が多い。特に百濟からは国を挙げ移住している。
- ・ また、大山寺宝物館の名誉館長である杉本氏によると。
 - ☑ 伝承者 杉本良巳氏：
 - ✓ 確証はないが「淀江」の語源も「ヨダ（豊かな）」という意味の韓国語から来ているのではないかと語る。
- ・ そして、最も大きな痕跡が妻木晩田遺跡、上淀廃寺に見ることができるのではないだろうか。近年、山陰地方では古代史にまつわる歴史的な発見が多くなされている。
- ・ 荒神谷遺跡から始まり、加茂岩倉遺跡、青谷上寺地遺跡、そして妻木晩田遺跡と続いたこれらの発見は、今まで日本書紀や古事記にでてくる出雲神話は、「全くの作り話」といわれてきた常識を根底から覆すような大発見である。
- ・ いずれにしても弥生時代には、日本最大級の集落がこの山陰にあったことは動かせない事実である。今でいえば、東京、大阪クラスの都市がこの山陰にあったということになり、少し考えただけでもワクワクしてくる。

< 大陸文化はどうやってきたのだろうか >

- ・ 数々の痕跡を残している大陸の文化が、どのような経路でこの山陰にたどりついたのであろうか。
 - ☑ 伝承者 杉本良巳氏：
 - ✓ 当時の大陸文化を受け入れる表玄関は九州であっただろう。
 - ✓ しかし、この山陰地方にも大陸から直接やってきて、文化を伝えた人たちもいた。特筆すべきことは、この山陰地方には九州経由で入ってきた大陸文化と、直接入って来た大陸文化が混じり合い、独特の文化を形成していることである。
 - ✓ 「国譲り伝説」について、はじめに渡ってきた渡来人の文化と、後から渡ってきた渡来人の文化がぶつかり合い。後から来た渡来人が、文化的に優れていたため国を譲ったのではないかと語る。
- ・ 「国譲りの伝説」については、いろいろな見方がある。
 - ☑ 伝承者 相見行佳氏：
 - ✓ 出雲に伝わった大陸の文化は、農耕、医療、航海術に長けた文化であり、広く民衆に支持された。しかし、争いを好まず平和的な手段により国を譲ったのだと語る。

2. 航海の目印“大山”

< 信仰の対象としての“大山” >

- ・ 朝鮮半島からの海流、天然の良港という地理的な優位性はあったが、なぜこの地にこれほど多くの大陸文化が伝わったのだろうか。
 - ・ そこに霊峰「大山」の存在がある。今のように羅針盤とか、GPSのない時代に航海の目印は、北極星であった。そして、もう一つの目印が「大山」であった。

 - ・ 太古に大海原を渡ってきた渡来人たちが目指してきたのが「北極星」と「大山」であるとするならば、その存在の大きさは現代の我々にも容易に想像できる。
- ☑ 伝承者 杉本良巳氏：
- ✓ 出雲神のシンボルマークは「亀」であり、出雲大社にも大きな亀の像がある。
 - ✓ この亀は、「北極星」を表している。すなわち出雲神の信仰は、北極星の信仰へつながっている。
-
- ・ そして、この地にもう一つ根付いた信仰が大山への信仰である。古代の信仰は、仏教とか、神道とかでなく“大山”という山自体を信仰の対象とするものであった。
 - ・ 中国には、高い山に死者の霊が宿るという考え方がある。中国人が一度は登ってみたいという「泰山(たいざん)」の信仰が物語っている。
 - ・ 大山に伝わる“賽の河原”信仰の原点を見ることができる。
 - ・ 杉本氏は、確証はないが大山の語源も泰山の辺りから来ているのではないかと語る。渡来人たちの航海を見守ってくれた「大山」と彼らの持っていた信仰が結びついたのかも知れない。

 - ・ 大山信仰は、農業との関わりが大きい。農業に大切なのは、水と気候である。
 - ・ 歴史をさかのぼると「大山の歴史」は「水の歴史」でもある。大山寺の起源が書かれている大山寺縁起にも、大山は清らかな水が湧く場所であると描かれている。
 - ・ 大山は太古の昔から、この地に根を下ろし台風などの悪天候から我々を守ってくれている。私が実感していることであるが、大山を越えて台風が北上してくることはほとんど記憶にない。また、台風が接近している際に、ある山に登ったことあるが、その山の南側に台風がある時、台風を背にした北側の斜面では驚くほど風が弱かったことを覚えている。大山が、その北側に位置するこの地方を守っていることを実感する。
 - ・ このように大山山麓の人たちは、大山の恩恵を受けて暮らしていたのである。

< 大山信仰と海との関わり >

- ・ 大山信仰と海の関係にも興味深いものがある。大神山神社に祀られているのは、「オオナムチの神」すなわち「大国主命」である。

☑ 伝承者 相見行佳氏：

- ✓ 航海の安全を祈願することで有名な、金比羅さんに祀られている神様も大国主命である。つまり、金比羅さんに参るのも、大神山神社に参るのも、出雲大社に参るのも同じことであると笑う。

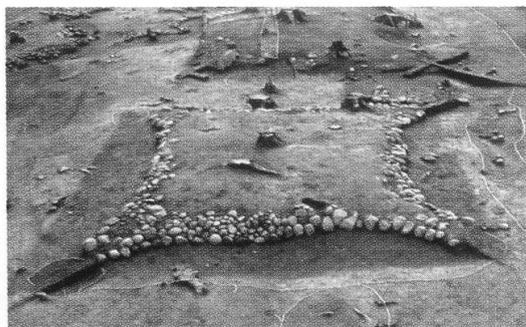
- ・ 天承3年(1173年)焼失した大山の寺坊を再建した紀成盛は、海六兵衛といわれ海運で財をなした一族であり、海に関わる人たちからの信仰をものごといている。ちなみに、紀成盛の家は、岸本の長者原にあった。というより長者であった紀氏が住んでいたから「長者原」と呼ばれるようになったようである。
- ・ また、大神山神社奥の院の横にある下山神社の紋章も六角形の亀の紋章である。
- ・ このように大山信仰と北極星信仰、そして海とのつながりが伺える

- ・ 妻木晩田遺跡で見られる四隅突出型墳丘墓について杉本氏は次のように語る。

☑ 伝承者 杉本良巳氏：

- ✓ この四隅突出型墳丘墓は、亀の形を模したものであろう。突出した部分が墓道という説があるが、墓道なら一箇所が良いはず。
- ✓ 亀のお墓は新羅に原型があるが、人は死ぬと亀に乗って海に戻るという信仰に基づくものである。

- ・ 大陸に古くからある
 - 死者の霊は、高い山に宿るという信仰
 - 死者の霊は、海に戻るという信仰
- ・ これらの大陸の文化が融合して伯耆の文化が形作られたのかも知れない。



四隅突出型墳丘墓

前方後円墳の出現によって四隅突出型墳丘墓は衰退していきます。この墳丘墓は、出雲文化圏の盛衰を伝える大変貴重な遺跡といえるでしょう。

大山王国 歴史文化 探訪 MAP より

3. “大山の水”が生んだ白鳳の大都市「妻木晩田」

<清らかな水のあるところにできた大山寺>

- ・ 大山寺縁起には、出雲の国 玉造の獵師依道が狼を追いかけて深山に踏み入ったところ地蔵菩薩が表れた。狼に身を変えた大山の神が「清い水のあるところに祠を建てて地蔵菩薩をお祀りしなさい」と言ったと伝わっている。
- ・ その依道が大山寺の開祖といわれている「金蓮上人」である。
- ・ つまり、大山は「清らかな水」のあるところなのである。

- ・ 大山で自然公園指導員を勤める遠藤氏によると。

☑ 伝承者 遠藤勝壽氏：

- ✓ 大山は1万数千年前までにできた成層火山である。
- ✓ 豊富な湧水を有する富士山と同じような成り立ちである。火山灰や火砕流が降り積もってできているため、雪解け水などがしみ込みやすく豊富な水を蓄えている。
- ✓ また、西日本最大級のブナの原生林を抱えている。ブナは、緑のダムと言われるほど保水力がある。
- ・ その豊富な水が大山の周辺のいたるところで湧き出している。
- ・ 大山頂上には、地蔵ヶ池、梵字ヶ池という二つの池がある。この水を「關迦（あか）水」と言い、大山で最も神聖な水とされている。江戸時代に大山で行われていた弥山禅定の行事では、大山山頂に登った行者が、写経を納めた後、持っていった「關迦桶」に、この「關迦水」を汲んで帰り山内の寺坊に配ったという。

<大山寺周辺に湧く水>

- ・ 金蓮上人がどこに地蔵菩薩を祀ったかは別として、大山寺と榊水を結ぶ標高 700～800 m付近には湧水が多く見られる。大山を釣り鐘とするならば、その縁に当たる場所である。
- ・ 榊水高原の「榊水」は、一年中玉のような水をたたえていたと言う「真清水（ましみず）」がもととなったという。横手道の鳥居を下ったところにある「清浄泉」、大山寺縁起絵巻にもその名を刻む「利生水」などがある。
- ・ このような清らかな湧き水が、最盛期に寺坊 106 坊、衆徒 3000 人を抱えていたという寺院集団「大山」が、この地に出来たきっかけであったのかも知れない。

<大山山麓の湧き水>

☑ 伝承者 遠藤勝壽氏：

- ✓ 昔から岸本の丸山橋の袂から湧水が湧いていた。その湧水が滝となって南光河原から流れてくる佐陀川に注いでいた。その湧水の水源には「滝地蔵」が祀っており、大山まいりの人が足を休め、滝地蔵に手を合わせたという。
- ・ 現在は堰堤ができて滝は姿を消しているが、今なお豊富な湧水が湧いており、上水道の水源ともなっている。

- ・ 大山山麓で最も有名な湧水が淀江町の「本宮の泉」と「天の真名井」である。そして天の真名井からほど近いところに「上淀廃寺跡」と「妻木晩田遺跡」がある。
 - ・ 「豊かな入り江」・・・「淀江」に渡ってきた渡来人たちが、きれいな水のある妻木晩田に大きな集落を築いたとしても何ら不思議ではない。
 - ・ 妻木晩田遺跡は孝霊山の麓にあり、その地域を昔「高麗村」と呼んでいた。
- ☑ 伝承者 相見行佳氏：
- ✓ 朝鮮半島で戦乱が続き混乱していた時代に、孝霊山の麓に移住してきた人たちがいた。優れた文化を持っていた彼らは土地の人たちから優遇されていたと思う。
 - ✓ 孝霊山に伝わる大山との背比べの伝承は、彼らが故郷を忍んで伝えた話ではないだろうか。

<美保湾に湧き出す湧水>

- ・ その湧水は、地上からだけではなく海中からも湧いているという。
- ☑ 伝承者 石村隆男氏：
- ✓ 美保湾でも数カ所から湧水が湧き出している。
 - ✓ その水があるために美保湾で採れる魚が美味しいという話もあるという。

4. 日本中に広がった“出雲神”

<伯耆も、出雲の国だった>

- ・ 出雲神話と言え、遠い国の話のように感じる。実は、出雲神話の舞台は伯耆を含む大きなエリアであった。
- ☑ 伝承者 相見行佳氏：
 - ✓ 伯耆の国は、もともと出雲の国であった。白鳳時代に出雲から別れたものである。
 - ✓ 古事記でも、日本書紀でも、大国主命にまつわる伝説のある遺跡は、現在の出雲にはあまりなく伯耆や因幡に多い。出雲に伝わる伝説は、スサノウノミコトに関わるものが中心である。
 - ✓ このことを頭に入れてもう一度、伯耆の歴史を見直してみる必要があると語る。

<出雲神話は、作り話？>

- ・ 今、書店には出雲神話にまつわる書籍が数多く並んでいる。全国的に見ても出雲神話を見直そうとする気運が高まっている。
- ☑ 伝承者 関祐二氏：「「出雲神話」の真相」
 - ✓ 「出雲などどこにもなかった」という古代史学界の「常識」があった。
 - ✓ 第一に、約二十年ほど前まで、出雲の地で、神話に見合うほどの考古学上の発見がなかった。このため、記紀神話（「古事記」や「日本書紀」の神話）の三分の一を占める出雲の活躍は、絵空事に過ぎないと考えられていた。
 - ✓ 第二に、神話の中で出雲が大きな地位を占めていたからこそ、「出雲はなかった」との考えにつながったのではあるまいか。

<荒神谷遺跡の銅剣>

- ・ 昭和 59 年（1984 年）島根県斐川町で荒神谷遺跡が発見され、整然と列べられた銅剣が 358 本発掘された。それまで青銅器文化は北九州と畿内の二大勢力を中心と考えられていた。あるはずのない場所から大量の青銅器が出土したことで、古代史の常識を覆す大発見と言われた。それまで全国で発掘されていた銅剣の総本数が三百本程度であったと言われており、荒神谷での発掘の衝撃が伺われる。
- ☑ 伝承者 関祐二氏：「「出雲神話」の真相」
 - ✓ この地に「神宝」が埋められていることは、「出雲国風土記」が記録していることだった。大原郡神原（かむはら）の郷の段には、
 - ✓ 「天の下造らしし大神の御財を積み置き給ひし処なり」とあり、大己貴命（オオナムチノミコト）の神宝を祀った場所だったというのである。

☑ 伝承者 武光誠氏：「古代出雲王国の謎」

- ✓ 荒神谷遺跡から出土した銅剣の数 358 本が「出雲風土記」に見る神社の総数 399 社と極めて近いことに着目している。
- ✓ 整然と列べられていた銅剣であるが 4 列に分かれており各々数が違っていた。当時、出雲は四つの勢力圏に分かれており、その勢力圏内にあった神社の数とほぼ付合するという。この地は、何らかの宗教的儀式を行う場であったとしている。

< 加茂岩倉遺跡の銅鐸 >

- ・ 荒神谷遺跡発見から 12 年後、平成 8 年(1996 年)荒神谷遺跡から東南に 3 km ほどの大原郡加茂町で発見されたのが加茂岩倉遺跡である。
- ・ 農道工事の現場から出土した銅鐸の数は 39 個であった。それまで一箇所の遺跡から最も多く出土した銅鐸は 24 個であり、また銅鐸文化の中心と言われている奈良県から出土した銅鐸の総数が 20 個であったので、驚異的な発見であった。

< 鳥取県にある二つの遺跡の意味 >

- ・ 考古学の上で大きな発見として有名な遺跡は、佐賀県の吉野ヶ里遺跡や青森県の山内丸山遺跡などが知られている。
- ・ しかし、鳥取県にはそれらの遺跡に匹敵するか、またそれ以上の意味を持つと言われている遺跡が二つ存在する。一つは、気高郡青谷町青谷にある青谷上寺地遺跡であり、もう一つが西伯郡大山町と淀江町にまたがる妻木晩田遺跡である。

☑ 伝承者 関祐二氏：「出雲神話」の真相

- ✓ 鳥取県の二つの遺跡の大切なところは、何ととっても、二つの遺跡共に日本海に面し、天然の良港を持ち、朝鮮半島から出雲、そして越(新潟地方)へという流通の要にあったこと、邪馬台国やヤマト建国の直前、弥生時代の後期に繁栄を誇ったことである。
- ✓ すなわち、これらの遺跡は、弥生時代後期の山陰交流が、「出雲」という「点」から、日本海づたいに「線」でつながったことを伝えている。

< 青谷上寺地遺跡 >

- ・ 平成 10 年(1998 年)国道と県道の建設工事をきっかけで発見されたのが青谷上寺地遺跡である。木製品 9,000 点、骨角製品 1,400 点、人骨 5,200 点、鉄製品 250 点というおびただしい数の出土品が発見された。今だ全貌の発掘にはいたっておらず、発掘が進むと想像を絶する遺物が出土することが予想される。
- ・ 平成 12 年には、弥生時代の後期に殺害されたと思われる三体の遺骸(男性 2、女性 1)が見つかっている。その遺骸は粘土質の湿地で見つかったため脳の組織がそのまま残されており、弥生人の脳細胞の鑑定ができるのではないかと期待されている。
- ・ この遺跡で見つかった遺骸や遺骨には、戦乱によって殺害された痕跡が残されている。この三体の遺骸も、水路に無造作に放置されていた。回復した跡のない傷の付いた人骨も多数発掘されており、戦闘で傷つきそのまま亡くなった可能性を伺わせる。青谷上寺地遺跡は、弥生時代中期後半から弥生時代後期に繁栄していることが分かっている。

☑ 伝承者 関祐二氏：「出雲神話」の真相

- ✓ この時期は、中国の文書に記された「倭国乱」の時期と重なっている。
- ✓ 「魏志」倭人伝には次のようにある。
- ✓ その国、本また男子を以て王となし、住まえるところ七、八十年。倭国乱れ、相攻伐すること歴年、乃ち共に一女子を立てて王となす。名づけて卑弥呼という。
- ✓ 青谷上寺地遺跡の状況と「倭国乱」の記述が重なる。この頃、中国大陸で起こった動乱の激震が朝鮮半島を揺らし、その余波が日本列島にも伝わってきたのだという。

< 妻木晩田遺跡 >

- ・ 平成 4 年(1996 年)伯耆地方にとって、日本の古代史にとって歴史的な発見があった。これが妻木晩田遺跡である。
- ・ この遺跡は、鳥取県大山町から淀江町にまたがる 156 ヶタールの丘陵地に広がっている。今まで最も大きい弥生時代の環壕集落といわれてきた佐賀県吉野ヶ里遺跡の 1.3 倍もの広さを誇る日本最大級の弥生時代の遺跡である。
- ・ この遺跡の発見の衝撃を明治大学の名誉教授である大塚氏は、妻木晩田遺跡東京フォーラムの基調講演の中で次のように語っている。

☑ 伝承者 大塚初重氏：「妻木晩田遺跡をどう活かすか」

- ✓ 妻木晩田遺跡は、紀元前一世紀から紀元後三世紀にわたり連綿と遺跡が形成されてきた。
- ✓ 二世紀の後半から三世紀にかけての日本列島は、邪馬台国が台頭してきた時代であり、そのような歴史的激動期に日本海沿岸に妻木晩田遺跡があったことになる。
- ✓ かつて表日本、裏日本などという言葉を使っていたが、どうもこの時代の日本を見ると、日本海沿岸が表で、太平洋沿岸は裏であったと言うことも逆説的に言える。
- ✓ 1990 年代の日本の弥生時代研究に、妻木晩田遺跡は大きな衝撃を与えた。
- ✓ 新しい日本の弥生時代研究を想像する、いちばんの糸口になる重要な遺跡であると認識している。

- ・ 孝霊山の前面に突きだした丘陵地にある妻木晩田遺跡は、眼下に淀江平野が広がり、その先には弓ヶ浜、島根半島が見渡せる。まさに国引き伝説のパノラマを見るようである。
- ・ その昔、大山を目印として航海してきた多くの舟がこの丘の麓の入り江を行き来する光景が目につくようである。九州、北陸など日本各地から、また大陸などから来た舟もあったのであろう。



妻木晩田遺跡より弓ヶ浜を眺める

- ・ 私事であるが、私の父親の実家が妻木晩田遺跡の丘のすぐ下にある。父の子供時代には、裏山にある遺跡の辺りでよく遊んでいたという。そのような関係で私のルーツでもある妻木晩田遺跡には特別な思いを持っている。
- ・ 鳥取県にあるこの二つの遺跡に共通することは、日本海に面した入り江の近くに立地しているということである。島根半島に守られた穏やかな海に面した入り江の周辺に遺跡が集中している。航海技術が発達していなかった当時、陸づたいに航行した舟たちが中継地点として利用したのではないだろうか。つまり、交易の拠点としての役割を果たして、発展してきたと考えられる。この辺には、弥生時代の後期、山陰の地に大きな文化が花開いた秘密が隠されているのではないだろうか。

<越国まであった出雲の勢力>

- ・ 妻木晩田遺跡で特徴的なことは、四隅突出型墳丘墓の存在である。すでに四隅突出型墳丘墓と海の関係は述べたが、この墳丘墓の分布状況が注目される。
- ☑ 伝承者 武光誠氏：「古代出雲王国の謎」
 - ✓ 四隅突出型墳丘墓は、二世紀はじめ「安芸国」(広島県北部)の奥地で発生したものが、吉備を經由して出雲に伝わったとしている。そして、日本海側に沿って広がっていき「越国」(現在の富山県付近)まで伝わっていったという。
- ・ 四隅突出型墳丘墓がどこでできたかは別の問題として出雲の交易の範囲が越国まで及んでいたことが伺える。そして当時の首長たちの墓としてつくられた墳丘墓であり、その力関係は自ずと分かってくる。
- ・ 「国引きの伝説」にもこの状況を物語るくだりがある。
 - ✓ 四度目に引っ張ってきた土地が三穂の埼(美保関町)であり、その土地は「高志(越)」の都都の三崎で余っていた土地だという。
- ・ 伝説の中とは言え、越の国との強いつながりを物語っている。

<大国主信仰と出雲神>

- ・ 大国主への信仰は、大和朝廷が生まれる三世紀半ばより前に、日本全国に広がったと言われる。今なお全国各地に大国主命を祀った神社が多く存在し、その範囲は九州南部から関東、東北地方にまで及んでいる。
- ☑ 伝承者 武光誠氏：「古代出雲王国の謎」
 - ✓ 大国主尊信仰は、急速に全国に伝わっていった。各地の首長が祀る農業神は大国主尊と共通する祖霊信仰をふまえた神であった。そのため、人々は愛される大国主尊の物語が広まると、各地で祀られていた神と大国主命との融合が始まった。
 - ✓ しかし、それは各地の首長が出雲氏の支配下に入ったことを意味していない。
- ☑ 伝承者 相見行佳氏：
 - ✓ 出雲族は、農業、医療、航海術に長けた民族であった。その技術を活かして民衆からの指示を集めてきた。その出雲族の象徴が大国主命である。
 - ✓ 特に大国主信仰は、首長クラスはもとより、民衆のクラスにまで浸透していった。首長クラスの人材は、中央から派遣されることも多く入れ替わりがある。しかし、民衆は地元で根を下ろしているため根強い信仰となる。
 - ✓ そして民衆の心をつかんで出雲氏がほぼ全国を治めるようになった。
- ・ このことは、神話の世界に見る大国主命の人となりからも伺い知ることができる。この大国主信仰が出雲神への信仰とつながっていった。
- ・ その頃各地の首長が出雲族の支配下にあったかどうかは別として、全国に大国主信仰、すなわち出雲神の信仰が広まっていたことは間違いない。

- ☑ 伝承者 相見行佳氏：
 - ✓ 神社のルーツを調べるため奈良に行ったとき驚きの発見をした。
 - ✓ 大和朝廷のお膝元である奈良の古社の多くが出雲系の神を祀っていた。天武天皇を祀る橿原神宮の近くの大きな古社はみんな出雲系の神が祀ってあった。
 - ✓ このことは、大和朝廷をつくるに当たって出雲族が何らかの影響力を持っていたのではないかと語る。

- ・ そして、千数百年経った今でも脈々と信仰が続いているということが、その影響力の強さを物語っているのではないだろうか。

5. 鉄が育んだ伯耆の歴史

<川岸にできた3つの楽楽福神社>

- ・ 出雲、伯耆、因幡には、古くから続く神社がたくさん存在している。
 - ・ 皆生温泉で旅館を長年経営していた中島氏によると。
- ☑ 伝承者 中島敏行氏：
 - ✓ 伯耆地方には、古い社がたくさんある。
 - ✓ これらの神社の古い伝承を調べていくと、興味深いことがたくさんあると語る。

 - ・ 日野川流域には、鉄にまつわる多くの伝説が残されている。そして伝承にまつわる古社も多く存在している。特に楽楽福（ささふく）と言う名前の神社が多く見られる。
- ☑ 伝承者 坂田知宏氏：新日本海新聞社「伯耆乃国物語」
 - ✓ この「ささ」は砂鉄を表し、「ふく」は製鉄炉へ風を送る鞆（ふいご）を意味する。たたら製鉄の神様であるという。

 - ☑ 伝承者 相見行佳氏：
 - ✓ 楽楽福神社の多くは、川の曲がり角の内側に建てられているという。
 - ✓ なぜなら、川の曲がり角には砂だまりができ、そこには砂鉄が堆積するからである。
 - ✓ つまり、そこは大切な場所であり、神社を建てるのに適した場所であったと語る。

- ・ その楽楽福神社には第七代孝霊天皇とその一族が祀られている。孝霊天皇は、隠岐島の鬼退治の後、日吉津に上陸し、溝口の鬼住山、日南の鬼林山の悪鬼を次々と征伐していったという言い伝えが残っている。
- ☑ 伝承者 坂田知宏氏：新日本海新聞社「伯耆乃国物語」
 - ✓ 日野川流域に伝わる鬼退治伝説と、岡山吉備津神社に伝わる桃太郎伝説は同じ伝承をもとにしているのではないか。
 - ✓ 日野川流域に入って来た吉備勢力が、この在地信仰を取り込んで、流域のたたら製鉄の神を自らに都合のよい祭神にすり替えたと考えていると語る。
- ・ 坂田氏は、実際に日野川流域に鉄文化を伝えたのは、古代海人族だった可能性が大きいという。海人族と言えば、岸本町長者原を本拠地にした紀成盛もその末裔（えい）である。西伯耆の鉄を支配し、海上交易で財をなしたと言われている。
- ・ 先にも述べたが、この紀成盛が平安時代、私財を投じて大山寺の再興に力を尽くしたことは良く知られている。紀氏家の伝承によれば、紀氏の祖先も孝霊天皇に従って、日野川の鬼退治に参加したと言われている。

< 全国の 8 割を占めた和鉄の一大産地 >

- ・ 伯耆、出雲、美作、備中、備後などの中国山地一帯は、昔から製鉄が盛んであった。その生産を支えたのが、中国山地から流れ出す良質の砂鉄と豊富な森林資源であった。
- ・ 最盛期の江戸時代には、この地域が日本の鉄生産の 8 割余りを占めていた一大産地であった。
- ・ 特に、伯耆・奥日野での鉄の生産は早くから始まっていたようだ。
- ☑ 伝承者 景山猛氏：新日本海新聞社「伯耆乃国物語」
 - ✓ 平安時代中期の「延喜式」によると、“国税”に当たる調で鉄を差し出すように指定されたのは美作、伯耆、備中、備後、筑前の五カ国であった。調の追加を定めた政令では、伯耆 606 てい、備中 290 てい、備後 250 ていの提出を義務づけられている。
 - ✓ 東大寺の寄進で鉄を出したのは伯耆、美作、讃岐だけで、伯耆は群を抜いて多かったと言う。
- ・ こうしてみると、古代から中世初めにかけて、製鉄の中心地は伯耆にあったのではないかと思えてくる。
- ☑ 伝承者 相見行佳氏：
 - ✓ 安来の金屋子神社も鉄の製錬技術を伝えた人を祀った社であるという。
 - ✓ 「延喜式」の神名帳には載っておらず、その後伝わってきたものではないかと語る。
- ・ 少なくとも平安時代には、出雲、石見、安芸の砂鉄製錬量はそれほど多いものではなかったと思える。
- ・ 鉄穴（かな）流しの技術が確立し、普及してからその生産量を伸ばしてきたのではないだろうか。そして戦国の世になり、尼子・毛利が奥出雲を舞台に鉄の支配を巡り争うところとなる。また、安来が鉄の積み出し港として大いに栄えることとなる。

< 宮崎駿の世界 >

- ・ 出雲地方でたたら製鉄を支えてきた鉄山師と言え、田部氏、糸原氏、桜井氏が御三家と呼ばれている。

☑ 伝承者 石村隆男氏：

- ✓ 宮崎駿監督は、田部美術館で有名な松江の田部家に約1ヶ月もの間、逗留したことがある。その影響が宮崎ワールドの中にも見られる。
- ✓ 映画「もののけ姫」の舞台は、たたら場である。
- ✓ 映画「千と千尋の神隠し」の舞台である湯場には多くの神々が集う。これは出雲地方の神在月（11月）を連想させると語る。

- ・ このようにして、もう一度宮崎作品を見直してみると、興味深いことに気づく。
- ・ 映画「もののけ姫」で、傷ついた主人公「アシタカ」をもののけ姫が水の中に横たえるシーンがある。水の中には屍がたくさん沈んでいた。
- ・ このシーンを見たときにこの地方に伝わる古い風習を連想した。それは亡くなった人を海に葬る風習である。

☑ 伝承者 関祐二氏：「出雲神話」の真相

- ✓ 山陰地方の日本海側では中世に至るまで「水葬」が盛んに行われていたようである。しかし、江戸時代に「水が汚くなる」との理由で水葬禁止令が出されたという。

☑ 伝承者 武光誠氏：「古代出雲王国の謎」

- ✓ 「出雲風土記」に、出雲郡宇賀郷に「黄泉の坂黄泉の穴」といわれる海岸の洞窟があったことが書いてある。その穴は、古代人の墓地であった。
- ✓ 宇賀郷の人々は死者を海岸の洞窟の中に葬れば、死者の魂は海の中の美しい世界に行けると考えたのだ。

- ・ このことは、「大山信仰と海のつながり」でも紹介した「死者の霊は、海に戻る」という信仰にも通ずるものである。

☑ 伝承者 杉本良巳氏：

- ✓ 東伯郡中山町の海に突き出た岬には、“捨て墓”がある。
- ✓ これは遙か海の彼方へ死者の霊が戻っていくという信仰からきているようだと言っている。

< 出雲街道の根雨宿 >

- ・ 松江藩の殿様が参勤交代で通った出雲街道の根雨宿は、明治時代まではこの地方の一大都市であった。明治元年には、24の山があった。約一万人がたたら製鉄に関わって生活しており、家族を含めると四万人もの人々を養う一大産業であった。
- ・ その中心的存在であったのが日本一の鉄山師である近藤家である。

☑ 伝承者 景山猛氏：新日本海新聞社「伯耆乃国物語」

- ✓ 近藤家が鉄山経営を始めたのは、江戸中期の安永8年（1779年）であったが、地域との強調、鉄山の合理化、優秀な手代（事務員）、販路の確立、蒸気力の導入など人を大切にす経営によって発展していった。

- ✓ 明治時代の半ば、近藤家は鉄山経営の近代化を進め、石炭と木炭を燃料に蒸気力で操業する福岡鉄工所を作った。そのころ日野の鉄山師は、ほとんど廃業していたが、明治 22 年鳥取県の和鉄生産量は、全国の 42% を占めていたという。
- ・ 明治時代の後半になると政府が洋鉄の生産を奨励したこともあり、それに押されて生産量を落としていった。その後、近藤家は大正 9 年まで和鉄の生産を続けたという。
- ・ この日野川流域における和鉄生産が、皆生温泉の歴史に大きく関わってくる。

< 鉄穴（かな）流しと弓ヶ浜 >

- ・ 当時、大量の鉄を生産するために砂鉄を採る方法として、鉄穴流しという手法が使われていた。砂鉄を多く含む柔らかい花岡岩を掘り崩して水路に流し込み、比重の差を利用して砂鉄を採取する方法である。
- ・ 砂鉄が含まれる量が少ないため、莫大な土砂を掘り崩す必要があった。
- ☑ 伝承者 坂田知宏氏：新日本海新聞社「伯耆乃国物語」
 - ✓ 日野川流域では、江戸の元禄期から大正時代までのおよそ 220 年間で、神戸港人工島の三分に匹敵する土砂が流されたという。
- ・ 今まで話してきたように、太古の昔、島根半島は沖合に横たわる防波堤のような存在であった。弓ヶ浜は今の姿ではなく「夜見の島」という島があっただけであり、中海も、宍道湖も存在しなかった。
- ・ 日野川および斐伊川流域から流れ出てきた土砂によって弓ヶ浜や出雲平野などがつくられ、その結果中海・宍道湖ができたのである。
- ・ 言うなれば、日本の鉄生産の歴史がこの山陰地方の地形を形づくったともいえる。
- ☑ 伝承者 坂田知宏氏：新日本海新聞社「伯耆乃国物語」
 - ✓ 日野川流域から流れ出た土砂で地続きになり、広大な国土を造った。
 - ✓ しかし、鉄穴流しが衰退した大正末期あたりから、上流からの土砂供給は減り、「負の“国引き”」が始まった。
- ・ これが皆生温泉と海の戦いの始まりであった。

6. 皆生温泉発見の秘話

< 紀一族による皆生村開拓 >

- ・ 天正年間（1580 年代）八幡新兵衛が村民を募って開発をしたといわれている。
 - ・ 当時、未開の地へ踏み入ることは大変な勇気がいったことであろう。その労が認められ、当時米子を支配していた吉川広家氏から警察権を与えられたほか、農作物、漁獲物とも税金を三年間免除されたという。
- ☑ 伝承者 杉本良巳氏：
- ✓ いくら未開の地といえども誰でも開拓できたはずはない。皆生温泉を開拓した八幡氏も、元をたどれば伯耆の鉄の交易を支配した紀氏の一族であったという。

< 皆生温泉の発見 >

- ・ 皆生温泉発見のいきさつは、大正 12 年に発行された「皆生温泉案内」松田亀三郎著に記されている。
- ✓ 明治初年の頃、浜辺から百間余り（約 200m）の沖に泡を吹きだしているところがあり、漁師たちはこれを「泡の場」と呼んでいた。はじめは魚が集まって息をしているのではないかと網を打ってみたがどうもそうではない。そこで舟から竿をおろし、伝って潜って見たところ、数十尺（約 10～12m）の海底からあつい温泉がわいているのを発見したという。これが皆生温泉発見の一齣である。

< 皆生温泉の誕生 >

- ・ 明治 33 年 9 月 4 日漁夫たちが海岸の浅瀬でわき出している温泉を発見し、一升瓶に温泉をくみとった。これが皆生温泉誕生の瞬間である。その日、20 人ばかりの漁夫がいて彼らの網小頭であった山川忠五郎氏が代表として発見者となった。
- ・ その場所は、車尾から続く皆生温泉三条通り（皆生通りの東側）の突き当たりの沖合にあたるという。
- ・ ここで一つの疑問が湧いてくる。なぜ、明治初年頃に 200m も沖合で見つかった温泉が、明治 33 年には海岸の浅瀬でくめたのか。もう分かると思うが、その約 30 年間の間に皆生温泉の海岸が 200m も沖に増えたことを物語っている。
- ・ このことは、皆生温泉の誕生秘話でもあり、もう一つの見方をすれば、たたら製鉄によって日野川流域から流れ出た土砂が作った、広大な国土づくりの一齣ともいえる。

< 海との戦いの始まり >

- ・ 大正 9 年、近藤家によるたたら製鉄の歴史に幕が下ろされた。
- ・ 国土交通省の資料によれば、大正 4 年頃から海岸の浸食は始まっていたとある。洋鉄の生産に押されたたたら製鉄が生産末期になり、生産量を落としていたことが伺われる。
- ・ 詳しい皆生温泉と海との戦いは後段に譲ることとして、皆生温泉と浸食の歴史に一応の終止符が打たれるのは、昭和 46 年 4 月建設省が離岸防潮堤（テトラポット）が皆生海岸の沖に敷設されるのを待たなければならない。
- ・ その約 50 年の間に皆生温泉を守ろうとする人々たちと海との壮絶な戦いが続いた。